

*この記事は日本経済新聞社の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。

日経MJ2016年10月12日付

保護主義とTPP

世界のあちこちで保護主義が台頭している。米国2人の大統領候補の議論を聞いていると、環太平洋経済連携協定（TPP）の批准はこのままでは難しいのではないかと考えてしまう。EUからの離脱という英国の国民投票の結果も、保護主義との関連で議論されることが多い。大量に入り込んだ移民が自分たちの職を奪っていると考える人たちが、EUからの離脱に賛成の票を投じたそうだ。



伊藤元重の

エコノウオッチ

がり、それが結果的に世界経済をさらに悪化させる結果になるという懸念だ。経済学者の世界では、貿易の自由化がもたらす利益を徹底的に議論してきた。過去に、保護主義の台頭でいかにひどいことになったかということも多く学んできた。それでも保護主義の勢力は衰えることを知らない。なぜだろうか。私たちが保護主義の強さの理由について、もっと深く考える必要がある。

利益より損失への不安

脅かされると考える人がいる。だから、体を張って反対する。一方、大多数の人は自由化の利益に無関心だ。一部に集中する被害が政治を動かす。これが古典的な保護主義だ。

保護主義が強い二つ目の理由は、行動経済学の議論が明らかにしている点だ。よつするに、多くの人は現状から変化することを好まないようだ。利益を得ることから期待される喜びよりも、同じ規模の損失から生まれる失望をより強く感じる、というものだ。貿易自由化によって良くなることを期待するよりも、それによって自分が損をすることをおそれる。だから人々は現状を変えることを警戒する。TPPに反対する声は現状を変えたくないという声にも聞こえる。

保護主義のもう一つの姿は、グローバル化に対する漠然としたイメージに対する警戒心だ。貿易の自由化と金融の自由化とはまったく異なったものだ。熱烈的な貿易自由論者の専門家でも、グローバルマネーの動きには規制が必要とする人も少なくない。ましてや人の移動の自由となると、物や金の自由化とはまったく異なった側面を多くもっている。こうした様々なものを十把一絡げにしてグローバル化と呼び、それに対する賛成反対を論じても意味がないように思える。それでも、現実の政治的な議論はそつしたアバウトなイメージによって動かされるものだ。私たちは、もっと保護主義なるものの実態について知る必要があるのかもしれない。これから国会でもTPPに関する論議が始まる。そこでどのような論理が展開されるのか注目してほしい。

（学習院大学国際社会科学部教授）